翻訳

マックス・ホルクハイマー

『理性概念に寄せて』（"Zum Begriff der Vernunft"）

永井健晴

（解題にかえて）

『理性概念に寄せて』と題されたこのテキストは、マックス・ホルクハイマーが、亡命先のアメリカから帰国してまだ日の浅い、一九五一年、十一月二〇日に、ヨーハン・ウォルフガング・ゲーテ大学学長就任記念講演のために準備したものである。ここでは、ホルクハイマーとここで試訳したテキストに関して、必要最小限のことを極く手短に記しておきたい。

周知のことながら、社会哲学者ホルクハイマー（一八九五～一九七三）は、一九三一年にフランクフルト＝マインで設立されていた「社会研究所」の二代目の所長となった。彼は、そこに多彩な研究者達を集め、三十年代から四十年代にかけての困難な亡命時代（ドイツ・ファッシズムの時代）を通じて機関誌『社会研究誌』を刊行し続け、多くのユニークな学問的成果を挙げた。戦後、彼はフランクフルトに戻って、ゲーテ大学の哲学科の講壇に再び立っている。『社会研究所』所長就任演説の中でホルクハイマー自身が述べていることであるが、この研究所の課題は、哲学者と経験科学者とが密接に連携した共同研究によって、言わば、現代社会に於ける人間の運命を見極めることであった。『社会研究誌』に発表されたホルクハイマーの哲学的エッセイは、一九六八年、アルフレート・シュミットによって編集され、『批判的理論』（全二巻）というタイトルが付されて公刊された。又、一九七〇年には、『社会研究誌』全巻の復刻版が出ている。さらに現在、没後約二十年を経て、ようやくホルクハイマー著作集が刊行されて

いる。

彼の社会哲学的論考の意図するところは、端的に言えば、実証主義科学の厳密な意味での「批判」である。それは、実証科学を退けて何らかの形而上学に付くことでも、科学と哲学との補完システムに逃げ込むことでもなく、実証科学を哲学ないしメタ科学と連動させて、所与の現実的条件に於て可能な限りの、語の本来の意味でラディカルな、社会変革と人間解放を目指す、所謂「批判的社会理論」を構築することである。ホルクハイマーは一九四四年に、今では古典的作品となっている、アドルノーとの共著、『啓蒙の弁証法』を、一九四七年には、同著の内容を敷衍した『理性の腐蝕』（英語）を出版しているが、ここに訳出した『理性概念に寄せて』に於ては、両著の内容が、コンパクトに、しかも両著よりさらに平明に展開されている。ここで中心的論点になっているのは、後期ウェーバーの「合理性」や「合理化」の概念の批判的検討である。ここには、ホルクハイマーの思惟を特徴付ける、彼の批判意識の奥底に潜む、ある種の、激しくしかも抑制された、倫理的感受性は、必ずしも明確に表現されてはいないが、少なくとも、上で述べたようなホルクハイマーの一貫した問題関心は、かなり鮮明に表明されている、と言えよう。さらに、ここで展開されている議論は、内容的に、ハーバーマスなどが戦後、実証主義科学、解釈学、社会システム論などに対して繰り広げた、一連の論争の出発点をなしている、とも言えるであろう。

ホルクハイマーは、初期のカントに関する博士論文や教授資格論文を除くと、ほとんど全ての哲学的労作を、エッセイのスタイルで書いている。その意味で、彼のテキストは、アドルノーやエルンスト・ブロッホのそれほどではないとしても、特にドイツ語を母国語としない者にとって、難解である。もっとも、彼は、ドイツ古典哲学のテルミノロギーは踏襲しているとしても、ハーバーマスやルーマンのようにジャルゴーンをやたらに多用するようなことがないから、その意味では読みやすいとも言えるであろう。ここで試訳したテキストは、もともと講演原稿であるから、表現の仕方の点では、比較的平易である。だが、内容はやはり極めて難解であるし、表現にかなりの曖昧さを残しているので、決して翻訳が容易であるわけではない。講演であるから、話し言葉のような調子で、できるだけ砕いて訳してみたが、なお多くの難点が残

っている。いずれにしても、これはあくまで試訳であって、誤読や訳文の表現上の問題点は、今後さらに正して行きたい。

尚、パラグラフごとの小見出しと［］内の語句とは訳者が付けた。

『理性概念に寄せて』

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学学長就任記念講演

哲学社会学正教授　マックス・ホルクハイマー

一九五一年十一月二〇日

［二つの理性概念］

ヨーロッパ社会の発展過程に於て、二つの理性（Vernunft）概念が、相互にくっきりした対照をなしています。一方の理性概念［客観的理性概念］は、プラトーン以来の偉大な哲学的諸体系に固有のものでありました。それらの諸体系に於ては、〈哲学する〉ことは、世界［宇宙］の理性的本質を像として写し取ること、言わば事物の永遠の本質を言葉で表すこと、あるいはその反響を聴き取ることでありました。哲学は自己自身をそうした営為として捉え（概念把握し）ていたのです。人間が真理を〈聴き取る〉ということ（Vernehmen）は、まさに真理（態）（Wahrheit）そのものが顕現してくること（Manifestation）でありました。そして、このような聴き取る能力は思惟活動の全てのはたらきを含んでおりました。やがて、制約を受けつけず自己自身を確信している形式的理性（Ratio）が成立します。この理性［主観的理性］は、ある固有の論理を形成し、主体を世界から分離・独立させ、即ち、主体と世界との間に距離を置いて、この世界を単なる材料と見做すようになります。こうして、客体にとっても主体にとっても同じように固有な、件の包括的な理性［客観的理性］に対抗して、形式的理性が成立するのです。この形式的理性［主観的理性］は、存在（あること）と混合することを拒み、存在を、単なる自然と見做して、ある一つの固有の領域の中へと追い込み、それ自身はこの領域の影響の外にあるのです。我々は、両方の理性概念を、しかし就中後者の自律的で排他

的な理性概念の方を、考察するつもりです。そして末尾の所で、両概念を統一するという問題を提起するつもりです。蓋し、この問題は社会を根底的に変革することと関連している、と我々は考えるからです。

［道具としての理性、主観的理性］

現在、理性という言葉が使われる場合、その言葉で普通考えられているのは、とりわけ後者の意味での理性、つまり道具としての理性のことです。その場合、有用かどうかが証明され得るものが理性的なものとして理解されるのですが、この傾向は増々強まっています。〈理性的人間とは、彼にとって何が有用かを認識できる人間である。この認識を可能にする力は、分類、推論、演繹と帰納の能力であるが、特殊な内容については、それがなんであれ、無関心である〉というわけです。理性は、日常生活に於て、そして、そこに於てばかりではありませんが、思惟活動のメカニズムの抽象的、形式的な機能と見做されているのです。この思惟活動のメカニズムが準拠している諸規則は、形式的且つ論証的論理の諸法則、即ち自同律、矛盾律、排中律、三段論法です。これらは、変わりゆく経験の影響に対して、思惟形式として、言わば思惟の骨格として、しっかり保持されます。この［道具的］理性概念が優位を占めてくるという事態は、［近代］市民社会［の成立］と切り離すことは決してできません。そして、そのこと［道具的理性が支配的であること］が、とりわけ現代を特徴付けてもいます。この［道具的］理性概念が、〈即自的につまり客観的に理性的なるもの〉という問題にかかずらうことなく、専ら〈思惟する者にとって即ち主観にとって理性的なもの〉だけを眼中に置いている限り、この理性概念を主観的理性概念と呼ぶことができましょう。この主観的理性は、とりわけ目的と手段との関係に、即ち手続きの仕方が諸々の目的に適合しているかどうかに、係わっています。その場合、その諸々の目的そのものは、多かれ少なかれ、いきなり無批判に受け入れられます。ですから、そこでは普通、それらの目的そのものが理性的であるか否かという正当化は為されないのです。主観的理性が、総じて、目的に関わることがあるとするならば、それは、次の二つのうちのいずれかのためなのです。即ち、ひとつには、目的が主観的意味に於ても理性的かどうかを吟味するためです。この場合、理性的というこ

とは、目的が、主体（主観）の利害関心に、即ちその経済生活上の自己保存に、役立っているということを意味しています。ここで自己保存というのは、個人のそれのことではないにしても、やはり個人が自己同一化する集団の自己保存のことです。あるいは、もうひとつには、それらの目的が実現可能かどうか、そして選択されるべき手段が適切であるかどうかといったことを吟味するためです。理性概念をこの後者のように使用することに制限してしまうことに、就中マックス・ヴェーバーの教説は、与って寄与しています。こうした理性概念の使い方に従いますと、ある目的は、他の目的と較べて優位にあること［内容的により理性的であること］を、要求することはできません。正義は理性的でも非理性的でもあり、それと同じく、力（Macht）は理性的でも非理性的でもあることになります。すでに、ヴォルテールは、透徹した彼の眼で、［近現代に現れた］かの独裁者達を予見していました。これらの独裁者達は、理性を有用性と等置するということに関して、格好の事例を与えています。彼等は、敵になりそうな者達に、心の中で次のように言います。〈もしお前達が従わないなら、お前達を打ち負かしてやるぞ〉と。そして、今後追随することになるべき者達に、表だっては、次のように言います。〈我々はあなた方より有力です。ですから、理性的になさい〉と。たしかに、主観的理性概念が、個人的有用性という立場を越えて、それ以上のものを、例えば、自分の家族とか、あるいはそれ以外の集団をも計算に入れることもありましょう。けれども、よしんばそうであったとしても、何らの利得もしくは利点を顧慮することなく、即自的に理性的な目的を、即ち内容的にも理性的な目的を考慮することは、やはりその主観的理性概念にとっては無縁のことです。このことと次のこととは全く対応しています。利害の計算からではなく、他の動機から行為する人、自分の利益をすばやく感じとることのできない人、こうした人は利害の計算のそれとは別のリズムで生活しているわけですが、こうした人も、風変りな人と見做されるばかりではないのです。こうした人は、非理性的な人、要するに馬鹿者と見做されることになります。真の理性に就いて、またそれを実現すること就いてもっともらしく語られることや、それに類したことがあるとしても、そんなことは、彼のような手合いを操り、だまくらかすための常套句にすぎないのであって、他のことと同様、要するに

単なる権力手段にすぎないということを、彼は把握していないからです。彼は、いい歳をしていても、まだ十分成長して大人になっていない、というわけです。

［西欧哲学体系に於ける客観的理性概念］

主観的理性概念が、今日多くの人々にとって、どれほど当り前のものに思われるとしても、それはいつも有力であったわけではありません。〈理性は個人の意識を支配しているばかりではない。理性と非理性の問題は、客観的存在にも、即ち、個々の人間間や諸々の社会的階級間の関係にも、社会的諸制度にも、それどころか、人間の外にある自然にも向けることができる〉―こういう見解が、主観的理性概念に対立していたのです。プラトーンとアリストテレース、スコラ哲学、ドイツ観念論の偉大な体系、これらに於ける強調的意味での哲学に就いて語るとき、我々はいつも理性の客観的概念に我々が向き合っていることに気付きます。この客観的理性概念は存在するもの（存在者）の全体に関係付けられています。この全体は個人と個人の目的をも包み込んでおりますが、しかし個人と重ね合わさってしまうわけではありません。ある行為、ある生活全体、ある民族の諸々の努力、これらがこの全体と調和することが、その場合、理性の批判基準なのです。ですから、現存するものの評価は、部分的な利害関心に照らしてばかりでなく、全体の客観的構造に照らして測られることになります。哲学的伝統に由来するこうした考えは、主観的理性を忌まわしいものとして唾棄したりしません。主観的理性は、寧ろ一般的理性態の一つの限界付けられた現れとして理解されました。強調点は、前者即ち主観的理性よりも、寧ろ後者に、即ち一般的理性態に置かれたのです。従って、個人から見れば、手段よりも寧ろ目的が強調されたのです。思惟活動のこのような様式は、〈哲学によって理性的なものとして概念把握される客観的秩序を人間の定在とその自己保存とに宥和させる〉という理念を、教示しています。プラトーンの「理想国家」［優れたポリスの範型］、トーマスの「秩序」(Ordo)と、トーマスとは正反対の立場に立っていたスピノーザのそれ、ヘーゲルの体系、これらはヨーロッパのこのような［客観的理性］概念の有名な例のうちの若干のものに過ぎません。

[客観的理性に於ける、存在と当為、認識と行為の一致]

これらの全ての[哲学的伝統、客観的理性概念]の基礎には、〈存在者の本性の洞察[真なる認識]は、価値を帯びているもの、[行為の]方向を指示するもの[善なる行為]と切り離されていない〉という確信があります。我々は、〈真なるもの〉をより深く洞察すればするほど、それだけ確実に〈為すべきこと〉を知ることになります。徳[行為能力]の規則は、〈存在するもの〉の認識から帰結します。徳[行為能力]と知[認識能力]とは基本的に一つのものです。世界秩序の輪郭を哲学的に構想することに就いて言えることは、日常生活に於ける経験に就いて言えること以外ではありません。子供が溺れかけているのを、通りかかった泳げる人が眼の当りにしたとき（フランクフルトの心理学者、ゲルプが、かつてこの例を使っていたと思いますが）、彼が眼の当りにした事態そのものが、自ずから彼が為すべき行為が何であるかを決めています。国にせよ仲間にせよ、それが緊急状態にある場合も同じことですが、その報告者の推論結果をまたずとも、その事態そのものが、[その場合為すべきことを]雄弁に語っているのです。そして、別のことを言えば、道徳的に若しくは感性的に美しいことが啓示されると、そのことは人を愛へと招き寄せることになります。この時、なにもわざわざ、一つの特殊な規準が与えられる必要はないのです。これらの例と同様に、件の哲学的諸体系に従っても、世界は、概して、その固有の言葉を語っているのです。そして哲学者は、その世界の言葉が誰にもはっきり分かるように、それを人の言葉にして語っているにすぎないのです。こうしたことを、主観的理性概念を自らのうちに含んでいる客観的理性ということを言うとき、私は念頭に置いているのです。

[世界の脱呪術化もしくは啓蒙の哲学的表現としての主観的理性概念]

両契機[主観的理性概念と客観的理性概念]は、重要な作品の中にはいつでも見られました。感覚主義者にして懐疑主義者のデイヴィット・ヒュームの哲学に於てさえ、〈客観的なもの〉と〈尺度を与えるもの〉に就いての思念が、その語り口を通して絶えず感じとれます。というのも、その筆致には、〈自然的なるもの〉への恭順の念が、賢者の最後の逃げ道として、頻繁に示されているからです。にもかかわらず、彼の仕

事は、主観的理性概念が自立化するという事態に深刻に関与しています。この主観的理性概念は、伝統的意味での啓蒙（主義）の一契機を成しています。即ち、それは、マックス・ヴェーバーがその過程を特徴付けたような世界の脱神話化（Entmythologisierung）、世界の脱呪術化（Entzauberung）を、哲学的に表現しているのです。ドイツ観念論に於て、主観的理性と客観的理性とを媒介させようとする最後の偉大な試みがなされました。しかしながら、それ以来、客観的理性概念の権利を通用させようと試みる全ての努力は、マックス・シェーラーのそれでさえも、作為的なもの、古臭いものであるように思われています。

［理性の危機、理性の自己破壊］

今日、ある非常にラディカルな意味で理性の危機を問題としなければならないとするならば、その理由は次のうちのどちらかです。即ち、〈客観的に理性的なもの〉という理念を欠けば、主観的理性も又あくまで不確かで支えを欠くものに留まってしまうのに、思惟活動がこの理念を捉える［それに表現を与える］ことができなくなってしまったからか、あるいは、そうでなければ、思惟活動が件の［客観的理性という］理念そのものを、欺瞞として、つまり神話の切れ端として否定し始めたからです。こういう発展は、如何なる概念であれ、その客観的内容を解体してしまうのですから、それは運命的性格を帯びている、と言えましょう。精神の支配的傾向を見ますと、このことを精神の担い手の全てが自覚しているか否かはともかく、全ての基本概念は、その実体性を奪われ、形式的な殻になってしまいました。それらの内容は、恣意に依存しており、それら自身、もはや理性的正当化に耐えなくなります。理性は、神話や迷信に対抗して、数千年に渡って、啓蒙の過程を導いてきました。この啓蒙の過程は、最後に、なお〈自然本性的な〉概念として、即ち主観的理性に依然として住み着いていた概念、例えば、自由と平和、ある究極的意味での人間の平等、人命の神聖さ、正義といった諸概念に対して、否それどころか、とどのつまりは、主体と理性という概念そのものに対して、向けられることになります。進歩は、言わば、自らが自らを追い越して置き去りにしてしまうのです。中世的世界像の解体後、哲学は［神学に替わり］自らの力で確固たる全体を提示することを企てました。検証し

得ないもの、当然疑い得るものを信じたりすることがなくとも、人間はこうした自ら提示した全体に準拠することができた［できるはずだった］のです。哲学を主観的理性に還元することは、哲学のこの企ての一環でありました。けれども、〈理性的な〉という述語を唯一なお要求することが許されていたもの、即ち、諸現象の確率的に最短の継起を先取りした巧みな定式、手段の主観的目的への最も柔軟な適用、思惟活動を純粋な道具に仕立て上げること、こうしたことは、成果が如何に素晴らしくとも、やはり、理性の一つの遊離化された契機であったのです。〈精神は人間の生活を、理性の上に、理性的洞察の上に、一つの意味の上に根拠付けることができなければならない〉という精神の要求は、理性そのものによって、不条理へと（ad absurdum）導かれてしまうことが明らかになりました。いずれの全体主義体制に於ても、とにかく主観的理性が、即ち適用される手段を目標へと関係付けることが、非人間的目標にばかりでなく馬鹿げた目標に役立てられていること、自己完結的主体の妨げられることのない自立性が、主権を有する権力国家へと、そして結局、世界を包括する権力ブロックへと拡大すること、そして、このことと結びついて、平和を好む諸国民に於てさえ破壊手段の生産の重要度が増大してゆくこと、全てこうしたことは、恐ろしいことに、自己保存の理性概念が自己破壊の理性概念へと移行することを、示しているのです。

［「〈私〉（自我）は救えない」］

啓蒙（主義）が実証主義へ移行することによって、結局、理性の概念そのものが、神話のある種の最後の陣地として、破棄されました。その場合、破棄されたのは、ヒュームがすでに抹消していた、魂のある能力としての理性、このプラトーンに由来する古い概念ばかりではありません。こうした成り行きは又、本源的統覚（die ursprüngliche Apperzeption）、即ち、カントに従えば全ての哲学を成り立たしめているはずである、統一的〈私〉（das einheitliche Ich）に就いてのカントの教説にのみ、関わっているのでもありません。プラトーンの教説の脱実体化されたこの模像［カントの教説］は、実証主義的認識論によって、［科学的］根拠のない形而上学として、［プラトーンの教説と］同様に、とっくに否認されているのです。こうした成り行きは、極めて現実的なもので

ありまして、「自我は救えない」というエルンスト・マッハの命題は、一つの現実的傾向を特徴付けています。

［自律的人格形成の背景にある自立的経済主体の消滅］

若干の社会学的指摘だけで、この傾向［自我・主体の消滅］を裏付ける［文献の中で証明する］ことができます。社会の重心が商人やその他の企業家といった自立的経済主体の多くにあった限り、生産的所有物を自立的に裁量すること［生産手段の所有］が、一つの支配的カテゴリーでありました。その所有者は、その所有物を父親と祖父から受け継ぎ、それをかれ自身の息子に受け渡しました。彼は、このような過去への反省や将来への展望に於ても、同じく又、自らの責任で仕事を裁量するにあたっても、カントが超越論的それとして特徴付けていた要因の全てを、即ち記憶力と構想力、理解力（悟性）と判断力を発達させました。彼は広範囲に渡ってはたらく自我を持っていたのです。人格を陶冶すること（Bildung）は、例えばウィルヘルム・マイスターに於て証言されていますように、その職業的意義付けによって、条件付けられていたのです。ところで、家族という大事に囲われている私的領域では、父親が、精神的人間として、子供に対立していました。父親への服従は、畏敬と愛情とによって、貫かれていました。だからこそ、誠実であること、分別（悟性）を徹底的に陶冶することに関する、義務履行の要求は、若者の心に肉体化され、良心の発達を促し得たのです。今日、サラリーマンの世界では、つまり自立的中産層の消滅してしまった世界では、思春期は短縮され、父親との精神的葛藤の意味での［家庭］教育にとって替わって、非プロレタリア層に於ても、集団―これは手強い問題なのでありますが―による教育と、現代社会で生計をたてなければならないという経済的圧力とが、現れています。多様な自律的人格の発達は、そうした人格がもはや経済的には同じ程度に要求されていないし、それどころか寧ろ（経済的）前進を妨げるものになっているだけに、それだけ稀になっています。別の特性［人の性質］が形成されておりますし、世界は急速に変わろうとしています。

［主観的理性に内在する危機、分離と意味喪失］

社会の中のこうした諸過程に於てと同様に、理性の機能化という精神的過程に於ても、ある単なる誤てる発展、言って

みれば歴史的逸脱といったものが問題なのではなく、少なくとも近代全体を通して一貫して追跡し得る一動向（特徴）の完成が問題なのです。主観的判断に対して正当化を要求すること［神話の破壊・イデオロギー批判］は、理性そのものの中にその根拠を持っています。そして、外からこの要求を阻もうと試みても、それは無駄に終わってしまわざるを得ません。ヘーゲルがかつて我々の言う意味で主観的形式的理性（Ratio）と呼んだような、〈純粋な洞察（純粋透見）〉（die reine Einsicht）、に対する闘争は、つまり反動のあらゆる試みは、―『精神現象学』ではこう述べられています―「すでに病気（純粋透見）が感染してしまったこと」を暴露している。「それはすでに手遅れであり、どんな薬も病気を一層悪くさせるだけである。何故なら、病気は、精神的生命の骨髄を、つまりそれ自らの概念に於ける意識もしくは意識の純粋な本質そのものを冒してしまっているからである。病気のまだ散見されるに過ぎない外症を押し留めたり、表面的な症候を緩和したりすることはできる。だが、そんなことは病気にしてみれば、ねがったりかなったりなのである。何故なら、病気は今や無駄に力を浪費したりしないで、徐々に密かに身体の大事な部分に浸透していって、やがて自覚していない偶像の全ての内臓と四肢とを徹底的に圧倒してしまうからである。そして、〈ある晴れた朝、それは相棒を肘でひと突きする。そして、ガラガラガラ！偶像は地に落ちる〉」。ところで、ヘーゲルはここではフランス革命を念頭に置いていたのですが、―この［最後の］言葉はディドロの作品のある箇所を仄めかしています―それ以来、歴史の畑には、砕かれた無数の概念の偶像の種が播かれ、そして無数の概念の偶像が復活しました。このこと［偶像の復活］の最も重要な理由の一つは、文化が分裂し専門化すること（Departementalisierung）によって人々が行為の方向を定めることができず途方にくれているということにあります。区分と清潔のセンスを備えた主観的理性は、すでに十三世紀のアヴェロイズムの結果、神学的知識と世俗的知識との分離を、ソルボンヌ大学の件の両学科［神学と哲学］の中に固定化しました。この分離こそ、近代社会の本質に属しているのです。一つの抽斗には宗教が、もう一つのそれには芸術が、第三のそれには哲学が、第四のそれには、これら全てから切り離され、数学的物理学のモデルに従った、科学があります。この科学が主観的理性の固有の支配

域であり、理論的には分離はこの科学から発するのです。そしてこの科学は人間をして行為の規準を欠いたままにしておくのです。まさにそれ故に、解き放たれた脱神話化の運動の中にすでに逆転が用意されていたのです。主観的理性概念が十六世紀のフランスに於けるそれのように人間性と最も緊密に結び付けられていたところでさえも、そしてその概念がこのような人間性の名に於て寛容とか宗教的宥和といった諸理念を定式化したところでさえも、その概念は支配的利害関心に対して自らが適応力を持っていることを証明しました。主観的理性概念は、例えばブルーノあるいはスピノーザの客観的体系構想よりも柔軟であった（順応性を持っていた）のです。学問や実践から個々の文化領域や価値領域が分離され中性化されるなら、一切が画一化され等価になるわけですから、当然ながら悪しきことをそれとして反駁することはできなくなります。「市長とモンテーニュとは常に二つで、截然と区別されていた。」職務にある人間と固有の名前を持つ人間とは厳格に分けられます。そして、モンテーニュはクヴィーントゥス・クルティウス（Quintus・Curtius）を引用しています。“Tantum se fortunae permittunt, etiam ut naturam dediscant”。（「彼等は運命の女神に自己を委ねていて、自然本性を忘れている。」）人は己の固有の自然本性を忘れる程仕事に没頭すべきではない、と言われているのです。しかし、理性がその内容を空っぽにされ、科学的理性にまで形式化されているとすれば、モンテーニュに於ても、後にはモンテスキューに於ても理性と一致している、自然本性とは何なのでありましょうか？その理性は現実の圧力に抗する何らの支えも提供しません。そして、まさにそれ故に、その理性が非合理的なものに身を委ねてしまうという危険に晒されたのは、なにも二十世紀の神話に於てはじめてであったのではなく、すでにモンテーニュの高貴な思想に於てであったのです。確かに、今日の新実証主義哲学が、即ち、あらゆる可能な意味、あらゆる内容的理念を伝統的言語によって制約されている偶像として駆逐しようとする所謂論理的経験主義が、不条理（馬鹿げた代物）であることは明白です。けれども、それと同様に、この意味喪失が理性概念の中に、つまり明晰且つ判明なる認識への意思そのものの中にもともと組み込まれている発展の帰結であることは、やはり争い難いことです。大衆社会の強圧とその駆り立てられるような営為に対してなお屈する

ことがなかった意識にとって、実証主義を実証主義たらしめている平板で無味乾燥な同義反復が如何に悪趣味で愚かしく思えようと、主観的理性の危機に於て問題にしなければならないのは、その理性自身の固有の本質であって、それの単なる誤用あるいはそれの単なる無自覚ということではありません。さて、主観的理性概念の支配から生ずる精神状況をなお立ち入って考察することに致しましょう。

〔自然支配に於ける操作的価値、意味の抑圧〕

主観的・形式的・道具的理性が承認する唯一の基準は、実証主義の言語がその理性の操作的価値と名づけるもの、即ち人間と自然とを支配する際に演じられる理性の役割です。諸概念は事柄そのものの質をもはや表現しません。それらがなお唯一役立てられるのは、知識材料（資料）を器用に処理し得る人がそれを整理する場合です。諸概念は、多くの個別的なものを単に縮約するもの、つまりそれらをより良く固定するための虚構と見做されます。概念の純粋に道具的意義を越えてしまうような、概念の使用には、いずれにも、〈それは迷信に捕らわれている〉という判決が下されます。概念の偶像に対する闘争は、人類史に於てどうしても必要な意義を持っています。というのは、概念の偶像は、黄金や象牙からできたそれと同様に、その供犠を要求したからです。―魔女裁判や狂信的人種差別だけでもお考えになってみて下さい―この闘争は今や言わば一つの外插法によって勝利を収めました。諸概念は、もはや苛酷な理論的政治的労働に於て具体的なかたちで克服されるのではなく、抽象的且つ要約的なかたちで言わば哲学的指令を通じて克服されます。但し、その場合、それらは、時代精神に合わせて、単なるシンボルであることを宣告されます。あたかも思惟活動そのものが、産業上の手続きの仕方の水準に還元され、生産活動の一断片になってしまったかのように、諸概念は労働を節約する作為的手立てと見做されます。諸理念は、それらが自動化や道具化の虜になってしまえばしまうほど、それだけそれ自身に於て意味がなくなり、同時に、それだけ一層、あたかもそれらが一種の機械であるかのように、物化されるようになります。アヴェナリウスやオストヴァルトの思惟経済の原理は、認識論に於てばかりでなく、例えば、極めて複雑な数学的操作に於てさえ時には人間の計算能力をも凌駕してしまう驚くべき機械の中

に、受肉（具体化）されています。計算の優位ということはすでにライプニッツの念頭に浮かんでいました。ヘーゲルは、この計算の中に、論理（学）全体の機械化という危険を、否それどころか、論理学と、従って哲学とが遭遇しかねないであろう最悪の事態を見ていました。やがて、こうした過程は、計算に置き替えることができず普遍的制御に服さないあらゆる精神的活動に関するタブーにまで行き着いてしまいました。人間や自然に就いての検証し得ない諸々のイメージを放棄することが、かつて、古びてしまった権威信仰に対抗して、人間性の名に於て正当にも要求されました。ところが今や、まさにこのことが、あらゆる意味一般の抑圧に転化してしまいました。

［手段としての言葉］

言語は、その際、近代社会の全能の生産装置に於ける一つの単なる道具になります。一つの手続きに対する処方箋として、他人を動かす手段として、指示、記憶の助けあるいは宣伝としては役立たず、固有の意味として、存在の反映として、存在の固有の運動として理解される［されなければならない］あらゆる言葉は、神秘的なもの、無意味なものと見做されます。そして人間はすでに、まさしく実証主義やプラグマティズムが解釈しているような意味での言語を、経験的に知ってもいるのです。誰かが何かを言う場合、問題となるのは、言葉の固有の意味ではなく、即ちその言葉そのものが意味していることではなく、寧ろ彼がその言葉で〈目論んでいる〉ことです。話すことそのもの、身振り、そして表情は、それが何事もそれで惹起（指示）しようとしていないなら、くだらないおしゃべりと思われてしまいます。人々は、いつも只単に他者と係わり、その他者をもってして何かを達成しようとしています。彼等が狙いをつけているのは、言葉の効果であって、言葉そのものでは決してありません。まさにそれ故に、誰もがひどく孤立し孤独でありながら、この世界にあっては、誰もがもはや一人でいられないのです。伝達や交通の様々な方法が生活を占拠してしまえばしまう程、人々の間の間隔が近くなればなる程、彼等がより多く語れば語る程、あるいは寧ろ彼等のためにより多く語られれば語られる程、それだけ一層、彼等はものを語ることができなくなってしまうのです。

［全ての価値の相対化］

物化された世界に於ては言語の意味がその機能もしくは効果によって取って替わることは、どんなに重大なことと受け取られても、充分過ぎることはありません。かつて理性に固有であったかあるいは理性によって是認されていた諸概念は、今なお使われてはいますが、今や使い古され中性化され、そして拘束力を持つ合理的証明を欠いています。それらの概念がなお存続し得ているのは、何等かの伝統のおかげです。同時代人はその伝統を、それぞれの趣味に従って、尊重すべきものとも、あるいは無様なものとも呼ぶことができます。啓蒙化された世界で増々幅をきかせるようになっているタイプの意識にとっては、事実と数字との中にすっかり還元されてしまう科学というたった一つの権威しか存在しません。そして、〈正義と自由は、不正と抑圧よりも、即時的により善いものである〉という主張は、このような科学のカテゴリーに於ては証明することができません。科学的認識批判の評決に従えば、ある一つの哲学あるいはある一つの宗教を、他のそれらよりもより善いもの、あるいはより高次のもの、あるいはより真なるものと見做すような、特殊な種類の生き方は、如何なるものによっても正当化されません。目標に就いて熟慮し思いを凝らすことは理性の理性たる所以のことなのですが、理性が一度これを断念するや否や、経済もしくは政治の体制がどんなに暗憺たる専制的なものであろうと、それがとにかく機能している限り、〈それは非理性的だ〉と言うことは、たちまち不可能になってしまいます。そして、周知のように、全ての暗憺たる専制的体制が、千年の持続を誇示した体制ほどに、相対的に短期間しか続かないわけではありません。人間の尊厳といった諸概念がかつて国民を動かしたとき、それらの概念は、伝統に逃げ路を求めたり、科学的理性から分離された価値の王国に訴えたりしたのではなく、客観的に真なるものとして解釈されたのです。けれども、一つの伝統もしくは一つの価値が、それら自身に、即ち、拘束力のある認識から分離されたこの抽象的質に、つまり伝統に、訴えざるを得なくなるや否や、―それは、それらがそれら以外の何ものも自らのために提示できないので、そうせざるを得ないのですが―その時、それらはすでに自らの力を失ってしまっているのです。

［神話の残滓］

かの恐れを知らない戦士達［啓蒙主義者達］は、十七世紀の暴虐なる迷信に対して、世界を脱呪術化することを、旗印に掲げました。この脱呪術化された世界は、今日、戦いに勝利してから長きに亘って、文化的には密かに、その神話的遺産の残滓を糧にして、その命脈を保っています。形而上学的哲学も又、とっくに、この神話的遺産のうちに数えられなければならなくなっています。地下に密かに隠れたかたちで、自覚されることなく、あの何等かの神話的力が、なお現存しています。もしそうでないなら、主観性の［言わば］地下測量技術を前にして、どんな幸福も崩れてしまうでしょう。ごく最近でも、総じてなお人生を生きるに値するものとしているものは、かつてある物へのあらゆる喜びやあらゆる愛に内在していた〈温もり〉を糧にして生きています。幸福そのものは、アルカイックな特徴を備えています。そして論理的整合性は、その幸福を片付けてしまいますから、不幸と空虚な魂を自らに引き寄せてしまいます。ある美しい庭園を見たときの魂の喜びの中には、庭園というものが神々のものであり、神々のために手入れされていたとき、庭園というものに付随していた祭儀的なものの余韻がなお響いています。一度、件の記憶の糸が切れてしまっても、喜びや幸福に就いての残像は、なお残るかも知れません。けれども、それらの内的生命の炎は消えてしまっていますし、残像も長続きはしません。我々は、ある花をみたときの、あるいはある空間の雰囲気を感じたときの我々の喜びを、固有の本質をもつ所謂感性的（美的）本能に帰することはできません。そんなものは、途方にくれた哲学者の単なる逃げ口上に過ぎません。人間の美的感受性は、その前史を偶像崇拝の中に持っています。ある物の良（善）さとか神聖さへの信仰は、歴史的には、その美しさへの喜びに必然的に先行しているのです。同じことが、人間の尊厳（品位）といったような極めて決定的なカテゴリーに就いても言えます。かつて支配者や神々を前にした人々を襲った魂を震慄させるような畏怖の念がなければ、今日、人間の顔の表情の隅々にまで広がるような尊敬の気持ちは、実際に経験されないでしょう。それがなければ、尊敬の気持ちなどといっても、空虚な決まり文句になるだけでしょう。隣人の生命への尊敬の念の中には、新約聖書の愛のそれとともに、かつて十戒を定めていた旧約聖書の裁きへの不安の余韻も響

いています。全く忘れられてしまったわけではない経験、即ち、地中深く埋葬されている認識は、統計学的な批判基準を満足させはしませんが、やはり真理への要求を保持しています。ですから、こうしたものへの地中密かに隠れた繋がりがあればこそ、我々の文明の輪郭（見取り図）を与えている諸理念は、なお命脈を保ち、正当化を得ているのです。こうした経験に数えられるのは、遙かな過去の出来事の神話的体験です。けれども又、人々がそれ等自身を呼び起こした限りでは、偉大な歴史的出来事も、従って、同時に又、尊厳を一者と若干の者達に限ってしまうことに対する反抗、不正と不平等に対する反抗、苛酷な弾圧や制限に対する反乱も、こうした経験に数えられます。諸々の概念は、集団的無意識に於けるこのような神話の残滓がなければ、ヘーゲル流に述べますと、色褪せた〈説教じみたおためごかし〉になってしまいます。

［二元論批判、矛盾した事柄そのものへの内在］

こうならないためには、敬虔な願いといったものでは充分ではありません。理念が人々を支配するようになれば、世界はもっと良くなるだろう、と思われるかも知れません。けれども、このことだけでは、まだ人々に真理が与えられることにはなりません。理念は、成程、今日推奨されている他の万能薬と同様に、真理などなくても、信奉者を集めることはできます。しかしながら、真理がなければ、理念は人々の魂を摑むことはできません。その場合、信奉者を集めるか否かということ自体は、主観的合目的性の問題です。ですから、他の理想による方が事がよりうまく行きそうに思われて、より多くの信奉者を集めることにでもなれば、たちまち、以前の理想の方は、その信奉者を失ってしまうことにもなります。自由や人間性という概念は、客観的理性に付随していますが、この客観的理性が主観的理性の単なる苦し紛れの切り抜け策にすぎないのなら、そういう客観的理性はそれがそこに陥るまいとしている当の（主観的理性の場合と）同じ相対性に陥ってしまうことになります。かと言って、永遠性という価値に訴えても、アポリアから抜け出すことはできません。というのも、そうした価値は、理性を前にして、自らが真であることを証明できないからです。ところで、後期のシェーラーが辿ったような中間の道も助けにはなりません。彼は、技術

や経済の領域でのみはたらく思惟として、（自然と人間とを）支配する思惟である主観的理性を限定して設定し、そうしておいて、それを矯正するものとして、それとははっきり分けられた教養の知識と救済の知識とを求めました。こんなふうにするなら、ある種の多元論に陥ることになりましょう。こうした多元論は、それ自身の思惟カテゴリー（思想）を反省したり、このような哲学を哲学的に徹底して熟考してみたりすることを拒んでいる間だけ、露命をつないでいるに過ぎません。そういう多元論にあっては、文化即ち経済外領域は、それが（労働日とは）区別された休日のようなものと見做されてしまう、という危険を冒すことになります。あたかも、そこでは、概念の厳格な労働、即ち概念の批判的な社会的変革機能など問題にならないかのように、文化を分割し中性化しても、それは主観的理性の破壊作業に対抗する手立てとはなりません。主観的理性と客観的理性との対立を克服することは、それらのうちのどちらかを決断によって選択することによってでも、又外から対立を緩和したり、あるいは理念を実体化することによってでもなく、矛盾している事柄そのものの中に徹底して内在することによって、果たされるのです。

［生活諸過程総体の一契機としての理性］

今日、理性概念は危機に晒されていますが、この理性概念は、歴史的発展の基体なのではなく、その発展の諸要因の一つなのです。理性自身は明らかに、そのデカルト以来の近代的諸体系に於て、その分離され遊離化されている性格を誇示しています。しかし、理性がこの性格に固執している限り、理性に就いての全ての判断は、あくまでも誤っていることになります。理性の主観化は、否それどころか、哲学的思惟活動そのものは、人類の生活過程の総体から、一つの単に部分的な思惟活動として、つまり批判に服する有限で制限された反省として、展開され得るのです。生存の物質的諸契機から切り離されることで、思惟活動は、形而上学的原理にまで聖化され、そして歴史過程の土台として、解釈されました。寧ろ、精神と思惟活動の方が、この歴史過程に依存しているのに、そうであったのです。けれども、この歴史過程に関係付けられてのみ、理性は、その意味とその固有の存在を持つことになるのです。盲目的自然の強制から自己をもぎ離すために、そして自然を支配するために、――この点は、明らかに今

日、我々自身を愕然とさせる域に達していますが—理性が、自己を対象的諸契機から切り離し、自己を自立させたということは、確かに、必要（必然的）なことではありました。けれども、理性は、この分離が必要（必然）であると同時に見かけ上のことであることを、自覚しませんでした。理性は、神話と迷信を、主観的な制限された精神には還元され得ないもの全てとともに、投げ捨ててしまったのです。自己破壊を招き寄せた災厄の原因は、理性が完遂する当のものにではなく、理性が自らに王冠を被せてしまうことにあったのです。主観的理性は、かつて、それが、その独立した定在を、それ自身にではなく、極めて高い程度に於て、人間と自然との確執の過程である社会的分業［社会的労働の社会的分割］に負っていることを、高慢にも認めようとはしませんでした。全ての自己瞞着（自分が自分に盲目であること）には、こういう高慢が内在しています。主観的理性は、こうしたことを、躍起になって（故意に）否認すればする程、それだけ力をこめて、自分にも他者にも、自分を絶対的本質存在として見せかけざるをえなくなり、とどのつまりは、検証と懐疑という自分自身の原理に従って、自分自身を〈隠された質（qualitas occalta）〉として、亡霊の王国へと追い遣ってしまわざるを得なくなります。主観的理性は、かくて、ニーチェが理解したような、ニヒリズムの一つのエレメント（固有の活動域、成立要因）になってしまいます。主観的理性は、自らと自らの歩みのそれぞれの段階を、その意味に従って、諸個人間の、社会的諸階級間の、諸国民間の、そして諸大陸間の、歴史的確執（格闘、抗争）の諸契機として、概念把握することによってのみ、総体性への関係を獲得します。この総体性は、主観的理性に対立していると同時に、それ自身を包括しています。そして、この総体性に於てこそ、主観的理性の遊離化されている諸帰結が非理性であることが、繰り返し繰り返し証明され得るのです。この言わば自己を解放する主体の倨傲によって忘れられている連関は、たとえどのように無反省で素朴な形式であったにせよ、純粋な〈目的—手段—機能〉の中には汲み尽くされることのない客観的理性の教説の中には、しっかりと保持されていました。人間は他の人間達や自然に対して端的に対立しています。分裂を貫いて進んで行くことなしには、宥和は起こり得ないからです。全てのものがその手段となってしまう主観的形式的理性は、こうした人間の理

性なのです。けれども、分裂の揚棄は、ただ単に理論的過程では決してありません。人間と人間との関係が、そしてそれとともに又、人間と自然との関係が、支配と排他関係との時代に於けるそれとは別の形姿を与えられるようになったとき、そのときようやくはじめて、主観的理性と客観的理性との分裂は解消され、両者は統一されるでありましょう。けれども、そのためには、社会の全体に係わる労働が、つまり能動的な歴史的活動が必要です。ある人が他の人の手段にならないような社会状態を打ち立てることが、同時に、今や客観的真理と機能的思惟との分裂に於て危うく失われようとしている理性概念を充たすことなのです。

［哲学的思惟活動の課題、哲学と政治］

世界は、今日、理論的に思惟する者、即ち社会的聴覚を備えている全ての者に対して、ある明瞭な言葉を語っています。その言葉を聴き取り、たゆまず定式化することが、社会学と結びつけられる哲学的思惟活動の課題なのです。この思惟活動は、己を空しくして正確に語り、忠告を慎まなければなりません。そうすればそうする程、この思惟活動は、学ぶ者や行為する者達を通じて、実践的にそれだけ確かな結果をもたらすことになるでしょう。学問が〈存在するもの〉に誠実に献身することから、〈必要とされていること（為すべきこと）は何か〉が理解されるでしょう。そして、必ずしも目標が問題にされることがなくとも、目標は真の理論の全ての歩みの中に含まれているでしょう。というのは、全ての認識活動の中には、現実的なるものの中に駆り立てられるようにして分け入ってゆく批判的契機が潜んでいるからです。もっとも、その契機は、認識活動が処方箋やプロパガンダに歪められるならば、消えてしまいます。けれども、認識活動は、そのエレメント（固有の境域）にあくまで忠実である限り、単なる手段という性格を失い、歴史的エネルギーとなることができます。ですから、哲学は、プラトーン以来、政治から切り離すことができません。そして、我々は、世界状況が我々に強いているあらゆるペシミズムにもかかわらず、哲学と政治との密接な結び付きを、それどころか両者の統一を、今日でも確信してよいでありましょう。